

露地庭の石

2020.7.31

いかに人より目立つか、いかに目を惹くか。それが重要な処世術として語られる時代に、私たちが忘れがちな大切なことを教えてくれる味わい深い逸話がある。江戸時代の大名であり、茶の名人であった桑山左近という人の興味深い話である。

あるとき、桑山左近が、見事な石を手に入れた。そこで、その石を茶室の庭の入口に置いたところ、ある来客が、「あの露地の入口の石はまことに立派である」と、その石を褒めたそうである。

しかし、その褒め言葉を聞いた桑山左近は、少しも喜ばず、その来客が帰るなり、その石を他の場所へ移してしまった。その理由を問われた桑山左近は、次のように答えたと伝えられている。

露地庭の石というものは、決して目立つことなく、しかし、そこをすっと通って来る間に、気持ちが静まり、浄められるものでなければならない。

この逸話は、茶の精神における庭石のあり方について述べたものであるが、人間のあり方についても述べたもののようにも思える。決して目立つことなく、しかし、側にいるだけで、気持ちが静まり、浄められる。そうした人物が私たちのまわりにもいる。ところが、静寂を失った私たちの精神は、その露地庭の石に、気がつかないことがある。

『置かれた場所で咲きなさい』という本がある。100万部を超えるベストセラーとなった本である。筆者は、ノートルダム清心学園理事長だった渡辺和子さんである。

渡辺さんは9歳のときに、二・二六事件（1936年、昭和11年2月26日）で、陸軍教育総監だった父親を目の前で殺されるという体験をしている。「私も、目の前1メートルの所で43発の弾を撃たれた父が死んでゆく姿を見て、今日まで生きております。そして自分なりの花を咲かせる努力をして参りました」と書いている。

「小さきは小さきままに 折れたるは折れたるままに コスモスの花咲く」これは、金八先生が教師になるきっかけとなった高校の恩師が黒板に書いたという詩である。日本の教育者、教育学者、精神医学の医学博士である鼻地三郎先生の作である。鼻地先生は、日本初の知的障害児通園施設である社会福祉法人「しいの実学園」を設立、運営をされてきた方でもある。107歳の長寿を全うしている。

今の世の中では、とかく個性を出す、人よりも目立つことが必要とされている風潮がある。確かに就職試験などでは、そういった要素がないと厳しいかもしれない。だが、人には向き不向き、タイプというものがある。だれでもがそうなれるわけではない。

プロ野球の球団が、FAで4番打者ばかりをそろえたとする。これでうまくいくかというと、なかなかそうはいかないのが現実である。人には持ち味や適性というものがあり、集団や組織の中で、それぞれの役割というものがある。

本校の3年生の多くは、これから就職試験に向けて突き進んでいく。中には、“露地庭の石”となりうる人もいるはずである。集団や組織には不可欠な存在である。ぜひ、その人の持ち味が評価され、晴れて社会人となれるよう祈っている。